

私の保育

I はじめに

幼児のあそびは、その生活の中のもっとも中核をなすものであるといわれていますが、日々幼児とともにいる私は、幼児があそびに必要なものをつくり、一層あそびを豊かにしているということを、幼児の姿から改めて教えられ、その感をますます深くしております。

ここに、幼児がものをつくるという自己実現の活動が幼児の安定感を満足させ、それとともに集中力が育ち、次の活動へと発展させていった活動を記して、ご指導をうけたいと思います。

私の勤務する花岡幼稚園は、松阪の市街地に隣接し、数年前



長井 洋子

までは九十基にのぼる花岡古墳郡や、江戸時代の国文学者・本居宣長の奥つきを遠くにのぞみ、田園風景の美しさを満足させてくれたのに、今では、地域開発の波で新しい住宅地域となり、夏休み前までは雑草が繁茂していたのにまたたくまに赤土で埋め立てられ、その土には青や赤と、色とりどりのイラカが建ち並び、青空まで切り取っていています。

貧しい市財政の中で、幼稚園行政もかけごえとはうらはらに真正面からそのあおりをうけ、市街地域、住宅地域などは五歳児一年保育しか実現されていない現状なのです。

一年という保育期間を考えたとき、その前半は、対象を何かにみたててあそぶ、いわゆるごっこが一つの大きな活動の山をなしていますが、運動会を境に後半に入ると、ごっこそのもの

がだんだんとほんものらしさを求めてきて、模倣という活動が多くみられ、同時に役割の分化もはっきりと表われてきます。このころには、あそびに使うものをつくるということもしたいにうまくなり、実在化の方向へむかっていることが幼児の活動として記録されています。

幼稚園における指導とは、幼児の活動の発達としては握する必要があるといわれていますが、ここに、虫かごづくりの活動の中で、そのことを改めて考えてみようと思いました。

Ⅱ 夏休みがすんで

九月に入り、長い休み明けでT男T夫U子たちの退行現象が気になるが、他の幼児たちは三、四人の好きな友だち同志で、簡単なルールのあるゲームなどをたのしむようになってきた。一方まだごっこ活動も少なくないようである。ごっこの中であそびにつかうものをつくるのが盛んになってきたが、一学期のそれにくらべ、幼児のつくりたいもののイメージがいつそうはつきりし、ほんものらしい型を求めてきて、身近にある既成のものを利用する（たとえば、菓子箱へ虫を入れる）ことに満足しなくなってきた。しかし、幼児自身があそびに使うものをつくりたいという要求を満足させるには、まだ幼児の

頭の中で形や作る上での手順などが十分うかべにくく、作る上でこまっている場面も多いといった状態である。

このころには、例年みられる虫とりの活動が今年も予想されるので、

全紙の大きな白ボールに虫かごの展開の一部を印刷しておいた。(図1) なぜ印刷したかというと、六月ごろの箱づくりの活動では、折紙の延長した活動であったのが、ここでは一枚の紙から立体化への手順や、展開図をみることによって完成した虫かごが頭の中にうかべやすいようにと配慮した。

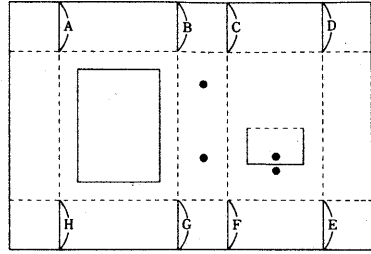
○ 作業の手順を誤ると虫が入れられないので、教師ができるだけ親切に教えるようにした。

○ 早く作りあげたいという幼児の要求をくみとり、接着力が高く、接着時間が短い、木工用ボンド・ビニールノリ等用意した。

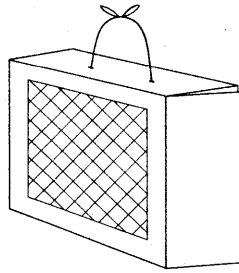
○ あそびの中で使用できる本ものらしいものにしたいたいとねがい、白ボールというはじめての材質を用意した。

○ 厚い紙だから、折り線をつけてきちんと曲げることを経験させたい。

○ その他、ビニール製金網・輪ゴム・足長ピン・紐など。



実線部分を延長することを子供にさせる
A-Hまでも切りこむ 図1



図II

Ⅲ 虫かごづくり

九月八日

(1) 朝の出会い 八・三〇〜八・四〇

「今日 朝の六時にお父さんとガモ取りにいったんや」

家の近くに残っているくぬぎ林へ、父親と自転車にのって虫とりに行ってきたとほこらしげに友だちにガモをみせ語りかけながら門をくぐってきたY生。

門のところで出会ったU治、M男は、いかにもうらやましそうにみている。

「あとで ほくにもかしてな」

と小首をかたむけて頼んでいるU治。

今日も暑くなりそうな空模様なので、水あそび場（幼児たちは足のプールとよんでいる）の砂を掃いたり、足ふき用の雑きんの用意をしたりしながら、彼らのやりとりを眺め、幼児を迎える。教師の姿をみつけたU治はさっそく

「先生先生、Y生君、ガモつかまえてきた!!」

と、ビッグニュースを伝えてくれるとともに、

「ぼくな 楠田のおにいちゃんに三匹よりようけつかまえてもろてかごへ入れとったんやけどな、もう死んでしもたんよ」

と悲しそうに泣くまねをする。教師はU治の気持ちをだいに受け止めたかったので

「そうやったの……」

と言葉すくなの返事をしながらも悲しそうな表情をする。

(2) 虫とりがはじまる 八・四〇〜九・〇〇

雑草の茂った園庭は幼児にとって絶好の虫取り場である。K男などは、チャリ（ざりがにをこのようにしか発音できない）

のおっかけから、小虫とりに懸命である。バッタ、ギジギジと右手にも左手にも虫をにぎり、教師に見せてくれる。彼はしばしばそれをにぎりつぶしてしまうこともあるが、ともかく『虫とりの博士や』と友だちからも認められ喜々としている。他の活動では友だちに及びもつかないほどの遅れをもっている彼だけに、担任としても全くうれい光景である。K男のあとについて虫とりにしていたN夫も、左右の手に小虫をつまんでいたが、手の自由がきかなくなつて、ビニールの袋を探してきてそれに入れ、ようやくほつとして袋ごしにじつと眺めている。

N男の袋をみていたS哉は、

「ビニールの袋は息できやへん、死んでいくぞ」

と自分の鼻をつまんでみせる。教師が、

「息できやんの？」

と不思議そうにききなおすとS哉は、

「そうさ、ホタルでも死んだんやもん。網へ入れたらんとかわいそやよ」

という答。単純に何もかも、かわいそう、ということばで処理していくことには少々疑問を感じながらも、ここ数日来、虫かごづくりを活動に入りたいと考えていた矢先だけに、この機会にと用意しておいた白ボールを、N夫たちのそばのテーブル

へもつてきて教師は黙って作業を始める。

(3) 虫かごづくりはじめる 九・〇〇〜一〇・三〇

S哉「あれ 何かいてあるの？」

げんそうな顔。教師は、

「何ができるのかな？」

とかつてにしゃべりながら、まず一、二本の延長線を入れ、メウチで線上に折線をつける。

次にカッターで網を張る部分、ドアの部分の切りこみを入れる。一人二人と教師のまわりにあつまつてきては、

「何ができるの？ 何になるのかなあ……」

と教師のしぐさをじつと眺めている。教師はそれから窓へ留意しておいた網（ビニール製）をビニールのりをつかつてはつてみる。つりさげ用の紐を穴に通して結ぶ。ドアのかぎとして足長ピンと輪ゴムを利用。最後に立体にし、木工用ボンドで接着する。(図2) 教師が網をはったころには、S哉たちは口々に、

「あつ 虫かごや……」

と大よろこび。T也たちも、

「ぼくのものつくつて」 「ぼくにもちようだい」

とだんだんと声が大きくなってくる。そこで教師は、

「先生はひとりでそんなにたくさん作れないから いっしょにつくらない……」と誘う

「うん つくろ つくろ 紙ちょうだい」

と大はりきりとなる。

用具の準備物を少なめに（ものさし四本、メウチ二本、大きいウシヤばさみも添える）しておいたので、六名の幼児がすぐ活動に入れなかったがお互いの仕事をみながら順番を待ち合う姿が見られほっとする。

S 哉はさつそく線を延長する作業にとりかかる。カメンライダーのうたがとび出しはじめたが実線に物差しをあわせ鉛筆を手にもつと、合わせたはずの物差しは線からぐいと動いてしまふ。二度三度とものさしを合わせるのだがむずかしい。左右の協応動作がうまくいかない。教師はそつとS哉のうしろへまわって、線に物差しがあつたとき、彼の左指のうえをおさえてあげる。

S 哉はほっとしたような表情をちらつと見せ、そろそろと鉛筆をはしらせる。ようやく一本の線がひけると「でけた」と叫び、ほっとしたのか手を休めてしまふ。

その間にU治は、さつと物差しを借り、八本の延長線をいっ

きに引き、

「先生できたよ」

と汗いっばいの顔に満足そうなひとみをかがやかせて教師にそれを見せてくれる。教師がまだ線引きのできていないところに気づかせてあげると、今度は容易にできる。手早くできたU治には、他の幼児がメウチで折線をつけているので、教師は網をはる部分、ドアの部分のカッターで切りこみを入れてあげる。U治は得意そうな表情で「こんなの簡単や」と意気込む。U治は友だちが使っていたメウチをかり折線をつけたあとで切り込み箇所へハサミを入れる。ビニール製網の接着、ドアのかぎをつけるのとT也は、さつと「サインペン」をもってきて、

「二丁けん銃のおまわりさんやぞー。おまわりさん二人が、みはつとるよつて虫がとびだしたら、バーバーンや」

ひとりごとをしゃべりながらドアの左右に二人のおまわりさんを描く。示した箇所にメウチをあなをあげ、ひもを通して結ぶ。

このように完成をよろこんだ幼児がいた反面、虫がとも入らない虫かごになった幼児もいた。

あとから活動をはじめたM子は切りこみ箇所のみようみまねではさみを入れ、四センチくらい長く切り込んでしまい、S哉

から、

「あつ、Mちゃんようけ切ったやんか……」

と指摘され、

「先生 ようけ切ってしもた」

と半べソ顔である。教師はすぐに、

「切りすぎたようだけど、裏からこの紙をはれば大丈夫よ」

とはる紙を切つて渡す、M子は、「こっくり」とうなずき安心したようすで再び作業をつづける。

H夫は、紙を折りまげる際に、うまくまがらないと、口をこわばらせて折りまげようと懸命にとり組んでいるが、友だちのようにうまくまがらないことに気づき、

「先生、ぼくのかみはかたいでまげれん、U治君のようなえ紙ちょうだい」

「H夫君、先生、U治ちゃんと同じ紙をあげたんやけど――」。

H夫君 まげたいところをもう一かい（メウチで線をたどりながら）すじをつけて、こうしてまげるとまげやすくなるのよ」

とH夫の前で実際に示してあげると、

「あつ、ほんとや ぼくする。」

と今までだったら、先生 だけへん やつて」と頼っていたのに、自分でやろうという意欲がでてきたことを教師もよろ

こび、いっそう励ましてあげたのに、最後に教師の気づかぬところで接着剤をつかわずセロテープではりあわしてはった。

また、のりづけの段階では、セロテープの接着で虫の足がひっかかり、ちぎれてしまったという過去の失敗から、教師はセロテープをつかわずにのりづけをするようにY生にも誘導した。ビニール製の網の接着には、ゴム製ののりを用意したが、接着剤を紙にのぼしたあと、皮膜ができてから接着する方が効果的なのだが、のりをのぼしてしばらくおく……ということがまだまだむずかしかった。

なお、最後の側面を接着するところでは、木工用ボンドを利用したが、普通の糊よりも接着力、接着時間が短いことなどは、幼児の活動を容易にしたように思われた。

(4) 虫かごをもって再び虫とりに 一〇・三〇―一一・〇〇

Y生の指についてる接着剤がまだ乾かないうちにもう、かごの中ではバッタがつつきあい始めている。ポケットにでも入っていたのだろうか？ 真剣な顔をして、持つところの紐を結んでいるY生をみると、聞くのをためらう。

早くできあがって外にとび出していたU治が保育室へ戻ってくる。みると、ビニール網がのびきってバッタの足が飛び出し

てきている。

「先生、大変だ大変だ」と大声。

さっさと、コーナのテープを使つての応急手当が始る。

M子は、できあがつた虫かごを後生大事に持つて、網に自分の鼻をくつつけて、中をジツとのぞいてみたりして、虫かごがつくれたことに満足している表情、友だちに見せたりして喜んでいる。

「M子ちゃん、どんな虫が入っているの?」

との教師の間かけに

「なんにも入つてへんよ、留守ですよ」

と平然としている。

M也はまた

「先生、兄ちゃんのものないし喧嘩するで、もう一つ作るワナ。

紙、オクンナナ(下さいの意味)」

といつて再び、作り始める。M也は手順がわかつたので、こんどは自分ひとりで行うことができるのがうれしらしい。

このようにあげていくと、ひとりひとりの組の幼児たちのそれぞれ違った表情、そして共通している生き生きしたようすが記したくなる。虫を出したり入れているので破れてきて、それでも、その上をビニールテープで修繕しては、また外へとび出

していく幼児の姿に、私は、なんとも表現のできない満足感にひたつてしまった。

(5) 童話を聞いてから降園のしたくをする 一一・〇〇〜

一一・三〇 以下略

III おわりに

このような実践の中で私が学んだことは、幼児が自分のあそびに必要なことから作りたいという要求をもち、保育者がその要求が実現できるように用意をしてあげれば、熱中した活動になり、幼児なりに仕事のみとおしをもつことができるということである。今の幼児には遊びのふかまりがないということを耳にします。が、幼児の側に発言を求めれば、きっと幼児たちは、こういうかもしれません。

「ぼくたちのやりたいこと、もつとやらせて」と。

(松阪市立花岡幼稚園)